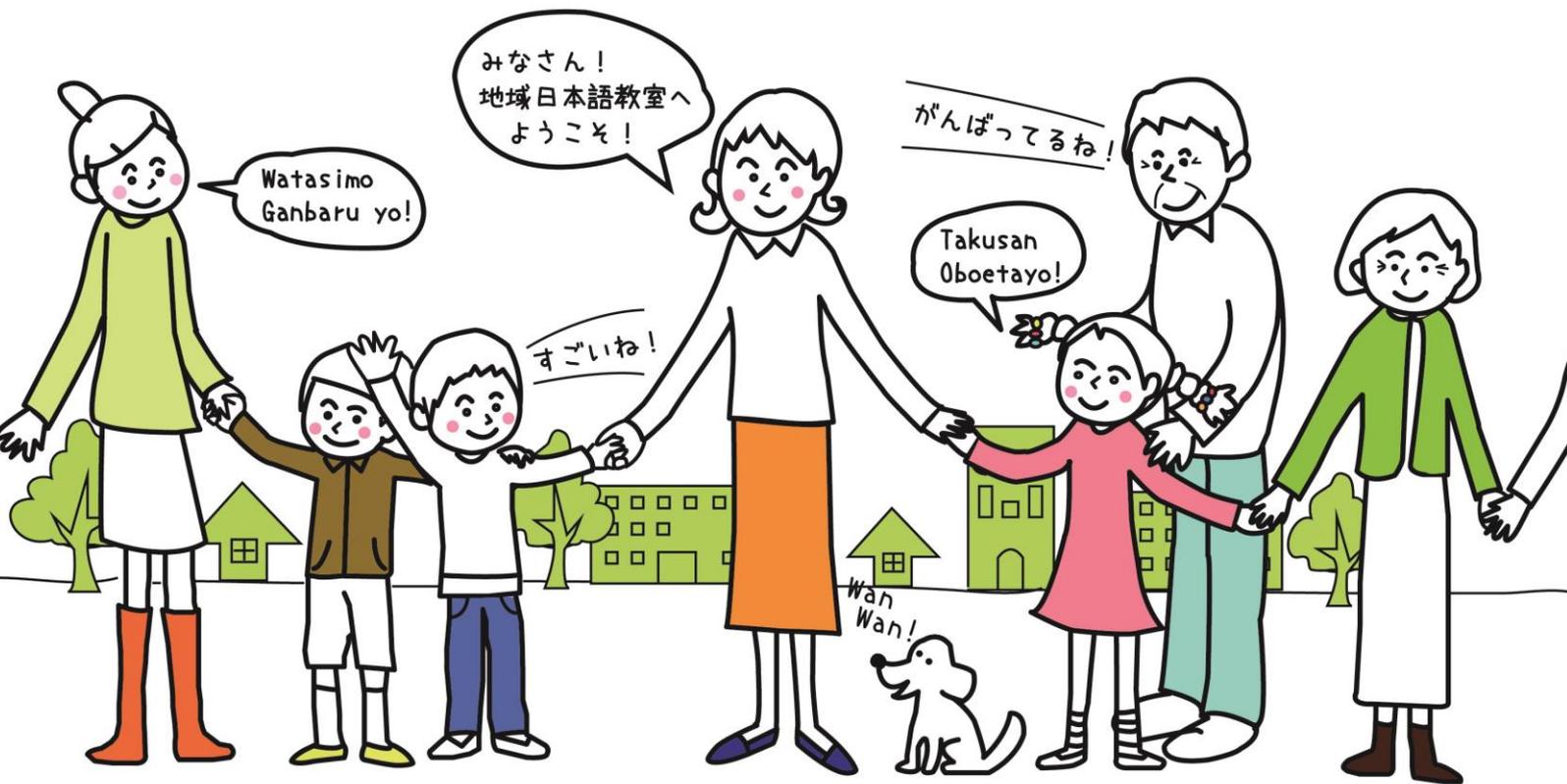


あいち

地域日本語教室

ハンドブック 

つなげる ひろがる



## はじめに

愛知県にはおよそ 20 万人の外国人が住んでいます。なかでも日本に永住する人が年々増えています。こうした人々がともに安心して暮らせ活躍できる「多文化共生社会」を作る重要なカギの一つが日本語でコミュニケーションする能力です。それを身につけるための機会は、これまで主に地域の日本語教室によって提供されてきました。しかし、機会の拡充など、ボランティアだけでは解決が難しい様々な課題があります。そうした課題に「オール愛知」の体制で取り組むことを目指して、本県では 2014 年 2 月、『愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方』をつくり、行政、日本語教室など日本語教育に関わる様々な主体に期待される役割などについてまとめました。このハンドブックはそのなかでも日本語教室を取り出して、地域日本語教室の活動のヒントをまとめたものです。

地域日本語教室の活動は、愛知県では既に 30 年近い歴史を持っています。この間、外国人の定住化が進むなかで、互いの理解を深めるだけでなく、外国人県民自身が地域社会の一員として能力を発揮できる環境づくりが課題となってきました。多くの県民の皆様が、日本語教室の活動の中でこの課題に取り組み、知識や経験を積み重ねてきました。ハンドブックは、これを継承し、多文化共生の地域づくりに向けさらに発展させるための手がかりとなることを目指しています。

作成に当たり、県内の日本語教室のボランティアの皆様を対象にアンケート調査を行いました。その結果を踏まえ、日本語教育の専門家、市町村、国際交流協会、日本語教室の関係者からなる検討会議で議論を重ねました。ボランティア一人ひとりの想いをつなぎ、多文化共生の地域づくりに向けて力を合わせるために、地域日本語教育のこれまでの実践から何を共有できるのかという視点で話し合いました。

この冊子を、現在教室で活動されている方々をはじめ、日本語教育や多文化共生に関心のある方に広く手にとっていただき、日本語教室が多文化共生の地域づくりに向けてどんな役目を果たせるのか、そのなかで自分たちの教室に、あるいは一人ひとりのメンバーに何ができるのか考え、話し合い、行動する参考にしていただくことを願っています。

この冊子が新たな気づきや出会いのきっかけとなり、皆様の実践がさらに豊かな活動のヒントを生み出すことにつながっていくことを期待しています。

最後になりましたが、調査にご協力いただいたボランティアの皆様、熱心にご議論いただきました検討会議委員の皆様、誠に厚く御礼申し上げます。

2015 年 1 月

愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室

## 目次

<b>地域日本語教室とは</b>	1
<b>地域日本語教室ではどんな人たちが学んでいるのでしょうか</b>	2
<b>地域日本語教室はどんな人が担っているのでしょうか</b>	3
<b>活動事例紹介 地域日本語教室のすがた</b>	5
「ママ友づくりで安心を生み出す」	5
東海市国際交流協会「子どもといっしょに日本語教室」(東海市)	
「協働で想いをカタチに」	6
特定非営利活動法人シェイクハンズ(犬山市)	
「外国人の立場で日常生活に役立つ学習を応援」	7
たんぽぽ会(蟹江町)	
「地域で共に生きるためのサポートを目指して」	7
あかばねひらがなの会(田原市)	
「地域の視点で外国人と共に暮らす社会を考える」	8
特定非営利活動法人トルシーダ(豊田市)	
<b>地域日本語教室の運営 10のヒント</b>	9
Q1 指導スキルへの不安にはどうしたらいいのでしょうか？ また学習者間にレベル差がある場合どうしたらいいのでしょうか？	10
Q2 最近「教える/習う」の方式を超えた、ありのままの交流を日本語教室でした方がいいとも聞きます。それってどういうことでしょうか？	11
Q3 教室に参加する外国人にとって居心地がいいと思える教室、ボランティアが外国人と楽しい時間を過ごせる教室にするにはどうしたらいいのでしょうか？	12
Q4 学習者の日本語能力向上のためにできることは？	13
Q5 日本語を勉強したい外国人のニーズに応えるには？ 子どもがいる、仕事が忙しいといった困難があっても気軽に参加できる教室をつくるには？	14
Q6 私の目標は教室を存続させていくことですが・・・	15
Q7 外国人が孤立せず、プライドや希望を持って日本で暮らすために、日本語教室の果たせる役割はあるのでしょうか？	16
Q8 外国人が自立して生活できるようになるためには？	17
Q9 日本語教室は地域づくりにどのような役割を果たしているのでしょうか？ 何のために地域とつながるのでしょうか？	18
Q10 目標と言われても特にないのですが・・・	19
<b>まとめ</b>	20
イメージ図「日本語教室ボランティア発！ 多文化共生の地域へ」	
地域日本語教室ハンドブック作成検討会議委員	

## 地域日本語教室とは

『愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方』から

### ◆あいち多文化共生推進プラン

愛知県では「あいち多文化共生推進プラン 2013–2017」を作成し、その基本目標を「多文化共生社会の形成による豊かで活力ある地域づくり」としました。そして、基本目標を実現するための施策目標として「誰もが参加する地域づくり」「多文化共生の意識づくり」「誰もが暮らしやすい地域づくり」の3つを掲げました。施策目標を達成するための主な具体的な施策の一つに、日本語教育の実態調査、指針の策定及び普及があり、2014年2月に『愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方』（以下『あり方』）としてまとめられました。

### ◆『地域における日本語教育推進のあり方』

『あり方』では、「地域における日本語教育の場」を「ことばや文化、国籍などのちがいに問わず、すべての県民が誰でも参加でき、日本語を使ってコミュニケーションをすることによって日本語の力を身につける場」と定義しました。

さらに、日本語教室は、外国人の学習を「支援する」役割、日本人と外国人、外国人と外国人の相互理解を助ける役割、外国人教室参加者と自治会やPTAのような地域コミュニティをつなぐ役割、という3つの役割を担っています。

### ◆愛知県の日本語教室

愛知県内の日本語教室は100以上、約1,500人の皆さんが日本語学習支援に関り、そのうち約80%は無償で活動しています。教室の設立時期は1985年にさかのぼり、1990年代、定住する外国人の増加に応じて設立が続きました。

近年は、フィリピンなどアジア圏出身の教室参加者が増え、来日の背景も多様化し、それに伴って必要な支援の方法や内容も変化しています。また、子どもの学習支援を行っている教室、企業などで受け入れている技能実習生が多数参加する教室もあり、ボランティアの支える教室がこうした変化への対応に努力しています。

### ◆『あり方』と地域日本語教室

『あり方』は、これまでの地域日本語教育の実践と、その間の社会状況の変化を踏まえ、多文化共生社会に向け地域日本語教室に期待される役割を示しました。今回実施した日本語教室ボランティアへのアンケートの回答には、これらの役割を肌身で実感されていることがうかがわれる記述が多くありました。

地域にはいろいろな形の日本語教室がありますが、活動に関わる皆さんが、『あり方』を一つの手がかりに話し合い、活動の意義や今後の方向をあらためて見据えていただくことで、新しい協力関係や、教室活動の広がりが生まれ、より多くの外国人県民の日本語教室への参加につながることを期待しています。

出典：あいち多文化共生推進プラン 2013–2017

『愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方』

## 地域日本語教室ではどんな人たちが学んでいるのでしょうか

日本語教室にやってくる学習者はどんな背景を持つ人たちなのでしょう。愛知県では2014年6月現在、159か国198,919人の外国人が暮らしています。愛知県の外国人住民数は2008年をピークに一時減少しましたが、2013年から再び増加に転じています。

### 在留資格でみる

在留資格の別でみると、「永住者」、「定住者」「日本人の配偶者等」、「永住者の配偶者等」など、生活者として日本語習得が必要と考えられる人が合わせて約15万7,000人にのぼり、外国人県民全体の8割近くにあたります。他方、何らかの施設・団体（大学・短大等をのぞく）で日本語を学んでいる人の数は、文化庁の調べによると愛知県ではおよそ8,300人とどまっています。

### 出身国別でみる

出身国別で見ると、もっとも多いのはブラジルです。1989年の「出入国管理及び難民認定法」改正で、3世までの日系人に就労の制限のない在留資格が認められることになり、以後この地域の製造業の現場で働くブラジル、ペルーなどの人が増えました。2008年秋以降の不況の影響で減少しましたが、愛知県にはなお48,220人のブラジル人が住み、全国で最多となっています。

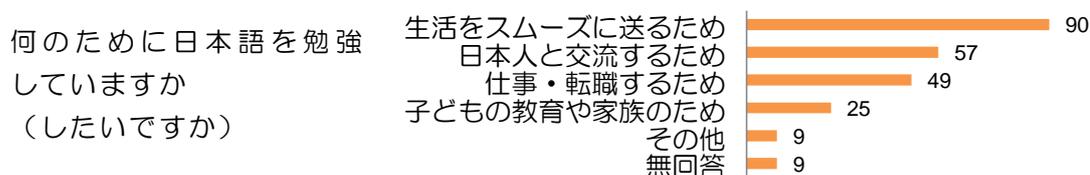
次に多いのは46,174人の中国ですが、近年少しずつ減っています。一方でフィリピン（28,372人）、ベトナム（7,821人）、インドネシア（3,098人）、ネパール（3,001人）などの出身者が増えています。在留資格では技能実習生が増えており、愛知県は17,951人と全国最多になっています。

### 日本語教室の学習者の国籍の割合でみる

しかし、日本語教室の学習者の国籍構成は全体の構成とは一致していません。2013年の愛知県の調査では、中国が26%と最多で、ベトナム14%、フィリピン12%の順で多く、ブラジルは10%となっています。国籍や在留資格により日本語習得をめぐる事情が異なることがうかがわれます。永住志向が強まる中で、子どもの教育、就労、地域社会への参加など引き続き課題が存在しています。

### 学習目的でみる

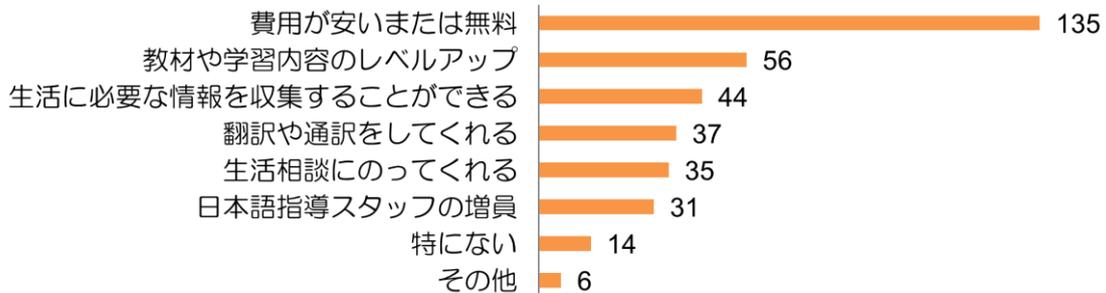
『あり方』ではヒアリングによるアンケートで外国人350人にニーズ調査をしました。地域日本語教室で学ぶ皆さんは、何のために日本語を学びたいと考えているのでしょうか。



参考資料 文化庁国語課編『平成25年度 国内の日本語教育の概要』  
法務省 在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表2014年6月

「生活をスムーズにするため」「仕事・転職のため」「子どもの教育や家族のため」との答えが合わせて 65% にのぼり、日本で暮らすために日本語が必要だと感じていることがうかがえます。

### 日本語の勉強以外に日本語教室に期待するものはありますか (主なもの 2 つまで)



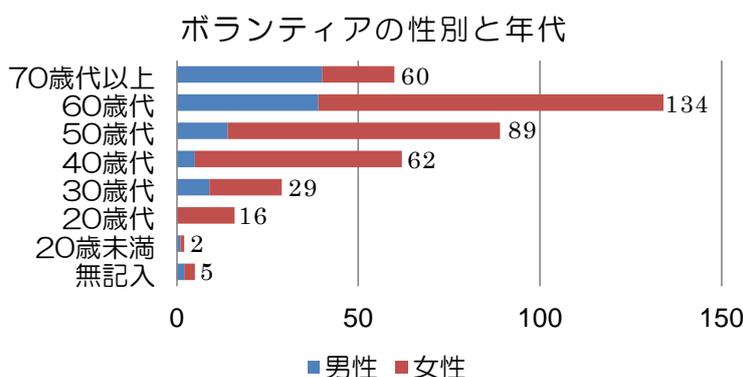
地域の日本語教室には様々な目的を持った学習者が集まります。「日本語の勉強以外に日本語教室に期待することはありますか」との質問への回答から、学習者は日本で生活するために、必要なコミュニケーションが取れるようになり、役立つ情報を得たいと考えていることが分かります。

身近な情報を案内してくれたり、親身に話を聞いてくれたり、相談にのってくれたりするボランティアは、学習者にとって心強い存在です。

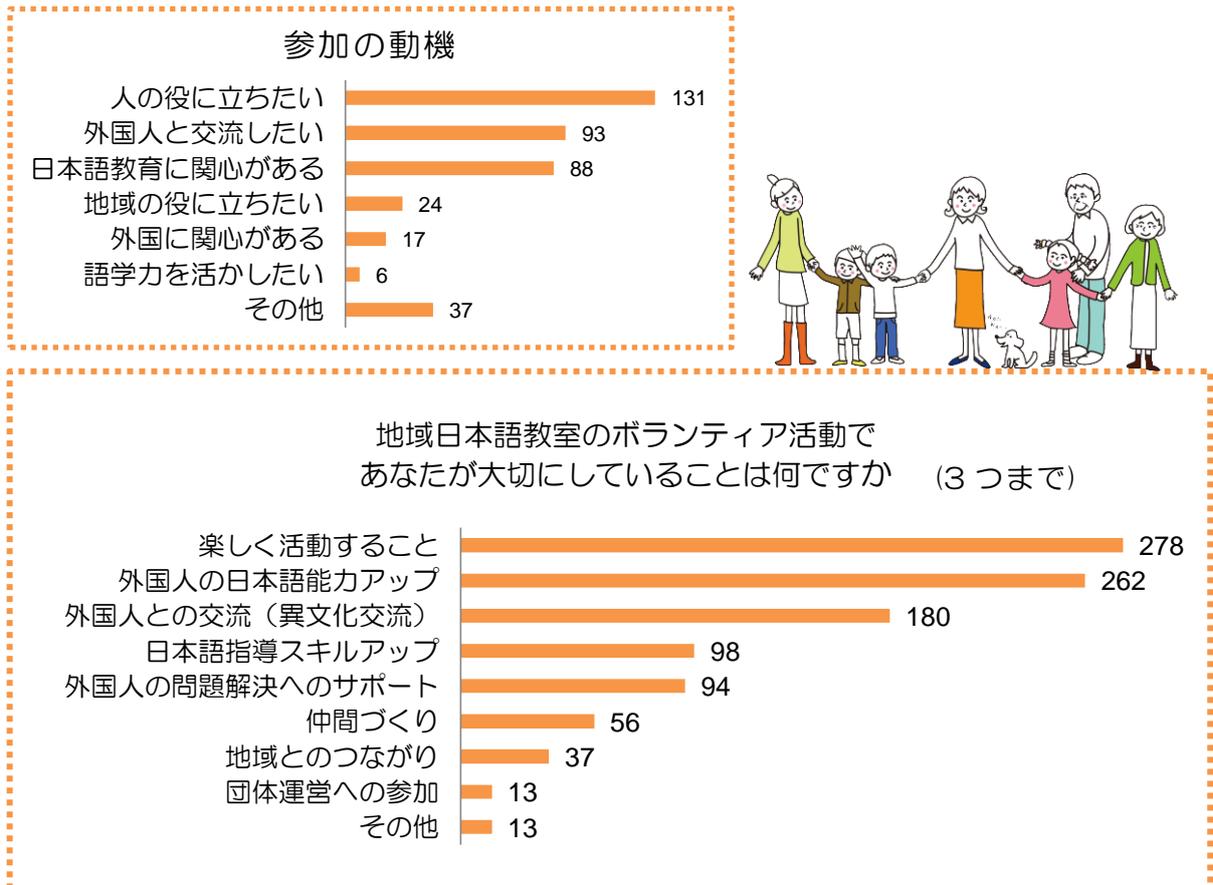
外国人と共に暮らす社会を考えると、地域の日本語教室が果たす役割は今後、ますます大きくなることでしょう。

## 地域日本語教室はどんな人が担っているのでしょうか

ハンドブック作成にあたり、地域日本語教室のボランティアの意識調査として、839 名にアンケートを行い、412 名(無効含む)の方から回答を得ました(回収率 49%)。選択式の質問に加え、「日本語ボランティアとしての目標は何ですか?」という自由記述欄を設けたところ、たくさんの意見をいただきました。アンケートから見えた地域日本語教室の担い手の姿を考えます。



地域日本語教室ボランティアは、4分の3が女性で、また、年代別でも50歳代以上が約4分の3という結果でした。



ボランティアを始めたきっかけや、活動で大切にしていることは何でしょう。「人の役に立ちたい」「外国人と交流したい」という動機から参加し、「楽しく活動すること」「外国人の日本語能力アップ」や「外国人との交流(異文化交流)」を大切に活動するボランティア像が浮かび上がってきました。

また別の設問に対する回答\*からは、地域の日本語教室が担っている役割を「外国人が身近に日本語を学べる場」ととらえる一方で「外国人が日本で生活するために必要な情報を提供する場」と意識している人も数多くいることがわかりました。このような一人ひとりのボランティアの想いを教室活動に活かしたり、地域の課題と結びつけたりするにはどうしたらいいのでしょうか。

地域課題に目を向けた取り組みも始まっており、次ページから「地域日本語教室のすがた」として事例紹介をしています。また、9ページからは「地域日本語教室の運営 10のヒント」を掲載しています。これらを参考に、話し合いの機会を持つてはいかがでしょうか。ボランティアが日本語教室の目的や方向性を考えることで、それまで見えていなかったつながりや視点に気付き、日本語を教える活動が、社会の課題解決や、外国人の地域参加を働きかける活動になっていくのではないのでしょうか。

参考資料: 地域日本語教室ボランティアアンケート (2014年9月)

\*アンケートのまとめは愛知県多文化共生推進室のウェブサイトに掲載  
<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html>

## 地域日本語教室のすがた

愛知県内で活動する日本語教室では、多くのボランティアのみなさんが外国人へのサポートを続けています。都市とその近郊など日本語教室を取り巻く地域の環境は様々ですが、共通するのは「外国人が直面している課題解決へのサポートをしたい」という熱い思い。その思いを実現するために愛知県内各地で多種多様な取り組みを展開しています。

ここでは、課題解決のために地域とのつながりを模索し、実践しているボランティアが活動する国際交流協会や NPO 法人、任意団体など 5 か所の日本語教室を紹介します。

また、「地域日本語教室ボランティアアンケート」結果の中からボランティアそれぞれが抱く活動目標の一部をまとめました。

### ママ友づくりで安心を生み出す

東海市国際交流協会「子どもといっしょに日本語教室」（東海市）

「鉄と蘭の町」東海市の国際交流協会で、乳幼児をもつ外国人の母親が安心して日本語を学ぶことができる「子どもといっしょに日本語教室」が開かれています。この教室は、同協会理事の堀ゆき子さんが日本語教室を「ママ友づくりの場」にしたいと提案し実施にこぎ着けたものです。

開催場所のしあわせ村にはおもちゃ図書館やリトミック教室\*などがあり子どもたちが安全に遊ぶことができ、施設を利用する地域住民とも自然に交流できる環境が整っています。同教室を開催するにあたり恵まれた地域の資源を活用するため、同所へ場所を移し 2009 年 9 月から月 2 回、午前中の 2 時間の教室を実施しています。ここでは、日本語の学習だけでなく 16 名のボランティアが学習者親子との交流を楽しんでいます。

日本で生きていくための術を身に付けたいと思っている外国人の中でも異国の日本で子育てをしている母親の抱える問題は深刻です。「学校からのお便りが読めない、理解できない」「先生との意思疎通が難しい」など、子どもの将来に関わる情報がなかなか入手できないため、母親ネットワークが不可欠です。外国人と日本人とが母親同士、必要とする情報交換ができる場としても同教室は大切な役割を果たしています。

この教室に参加するには同協会の会員になることが必要。堀さんは今後について、「ここで学んだお母さんが運営していくようになって欲しい」と外国人主体で活動する教室に育つことを期待します。

\*音楽と体の動きを合わせた教育法



勉強の後は楽しく交流

## 協働で想いをカタチに

特定非営利活動法人シェイクハンズ（犬山市）

「地域の共通課題を共に考えるネットワークをつくりながら、多文化共生の教室を実施したい」そんな想いが形になったのが「愛知県尾張北部等、外国人散在地域のネットワーキングによる日本語教育の推進～生活者としての外国人支援～事業」（文化庁委託）です。外国人の割合が少なく、問題も見えにくい散在地域での支援を考えるために、犬山市で活動するシェイクハンズの呼びかけで、犬山市、扶桑町、大口町、江南市、小牧市の外国人支援団体が協働して、連携のための会議と日本語教室を実施しています。



自転車教室で交通安全を学習

シェイクハンズ代表の松本里美さんは「犬山市にはペルー人が多く、扶桑町は技能実習生が多いなど、地域ごとに状況は違っても、関わる人たちが多文化共生という共通した視点を持つことが大切」と熱く語ります。また、市町を超え複数の教室に参加する学習者には「ネットワークができ、それぞれの教室の特徴が分かれば、学習者の目的に合った教室を紹介することもできる」とのこと。趣味のサークルや警察の協力を得て「自転車安全教室」等の生活に役立つ日本語教室も実施しました。広域でつながるネットワークと、地域を巻き込みながら日本語教室を実施することで、活動の理解者を増やしています。

### ボランティアの目標① ～地域日本語教室ボランティアアンケートより

- 始めてからまだ日も浅く、活動を終えて家に帰ってから「あの時はああいふ説明をすればよかった」とか「あの表現も教えてあげればよかった」などと反省する日々です。もっと経験を積んで日本語や日本文化についての的確に説明できるようになることが目標です。日本に來られた外国人の方に日本の良さを知って、より好きになってもらえるようにしたいと思っています。
- 学習者にとって、毎週楽しく通える教室作りを心がけたい。日本語の勉強だけでなく、学習者が日本で生活していくうえでかかえている問題を共に考え、アドバイスしてあげたい。学習者にとって日本語ボランティアや他の学習者と楽しいコミュニケーションがとれる居心地のよい場所にしたい。学習者に教えることによって自分の授業を見直し、指導のスキルアップをしたい。

## 外国人の立場で日常生活に役立つ学習を応援

たんぽぽ会(蟹江町)

愛知県の西部、海拔 0m 地帯にある蟹江町で活動する「たんぽぽ会」(上山まり会長)は、2009 年に発足し、日常生活に直結する日本語を学ぶ場を提供しています。発足時は上山会長の自宅で 5 名の学習者からスタートしましたが、現在は同町の「まちなか交流センター」で月 2 回開催しています。

同会長はミャンマーから来日して 24 年。自身が日本に来て苦労したことを踏まえて、学習者の「したい事」を出来るように、「困っている事」を解決するための授業を心掛けています。授業は病院での受付、診察などのロールプレイのほか、図書館、動物園や名古屋港への見学を通して切符の買い方や電車の乗り方などの社会勉強にも積極的に取り組んでいます。

上山会長は「外国人は日本人の 2 倍、3 倍頑張らないと溶け込めない」と語り、公園や職場などで困っている外国人を見かける度に声をかけ、地域での生活応援を続けます。



施設見学(ヒロシマの原爆展)

## 地域で共に生きるためのサポートを目指して

あかばねひらがなの会(田原市)

キャベツ畑が広がるのどかな環境の中で暮らす外国人の女性たちが、地域に馴染み生きていけるようにサポートする「あかばねひらがなの会」(中村都祁子代表)は、2006 年 9 月に発足。その頃、急激に増えた外国人妻たちの不安や悩みを聞いているうちに口コミで広がり、日本語教室へと発展しました。

当時、婦人会役員だった中村代表は仲間呼びかけ活動を開始。現在、約 10 名のボランティアが活動しています。同会では、日本語教室のほかに文化教室を開催。地域の展覧会などで作品を発表するほか、手づくり湯呑を東北の被災地へ送る活動などにも参加しています。また、料理教室では味噌やちらし寿司などを手づくりすることで学習者へ日本の食文化を伝えています。

同会では、発足当時から機関誌「あかばねひらがなしんぶん」を月 1 回発行し、



料理を通して文化交流

地域の話題や日本文化などの情報提供するほか教材としても活用。活動場所は公的施設を利用し、活動に必要な材料費についてはその都度徴収しています。補助金などは受けず、地道に地域に根付いた活動を続けています。

## 地域の視点で外国人と共に暮らす社会を考える

特定非営利活動法人トルシーダ(豊田市)

外国人住民が増えた現在でも「多文化共生は、外国人が多く住む特定地区の限定された問題」と捉えられる傾向があります。豊田市でも市内27中学校区中、26の学区に外国人が住んでいて多文化共生はどの地区にも必要な観点です。

トルシーダ(伊東浄江代表)では、昨年度(2013年度)市街地に隣接する高橋地区で「安心・安全なまちづくりのための『顔の見える関係づくり』事業」(愛知県委託)を実施しました。この事業は、日本人県民と外国人県民が、防災を切り口に自治会や地域の活動団体と意見交換を行う会議を開催し、連携して防災関係のイベントを行うことで、地域で顔の見える関係づくりを行うものです。この事業を同地区で活動する高橋地区災害ボランティア連絡会を始めとする様々な人たちや関係機関の協力を得て実施したことは、外国人の存在が意識されていない地域で、日本人と外国人がお互いを認め合いながら暮らすためのきっかけ作りとなりました。



地域イベントで交流

この成果を受け、今年度は、地域の拠点である高橋交流館主催で、「地震！火事！！そのときあなたはどうしますか？ 命を守る日本語講座「地震が来たらどうしよう？ ～もしもの時に地域で生き抜くために～」」が実施されることになりました。地域に根差した活動をしている団体や異なるテーマを持った団体との協働、行政との連携で、外国人と共に暮らす地域を考える事業を展開しています。

### ボランティアの目標② ～地域日本語教室ボランティアアンケートより～

- 学習者が生活者として、より能動的に主体的に暮らせるように協力したい。そのためにも日本語力をつけることも大事なことなので学び甲斐のある環境にする努力をしたい。
- 私の国籍はインドです。将来インドに帰ったら日本語の先生になりたいですから、日本語ボランティアとして活動しています。
- 日本人と外国人が仲良くするために一番大切なことは、やはり交流すること。言葉が理解できればより一層関係が深まります。外国の人を攻撃する風潮がなぜか強まっています。交流すれば仲良くなれます。そういうことをわかって欲しいと思います。必ず平和につながると思います。仲良くなることと、大げさに言えば世界の平和！それが目標です。

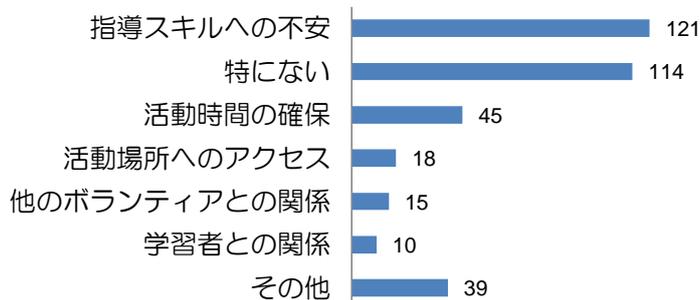
# 地域日本語教室の運営 10のヒント



2013年度に愛知県が県内成人向け日本語教室を対象に行ったアンケートでは、教室運営で困っていることとして「学習者が長続きしない」、「日本語指導のスタッフが不足している」、「学習者の日本語レベルが違いすぎる」といったこと等が挙げられています。

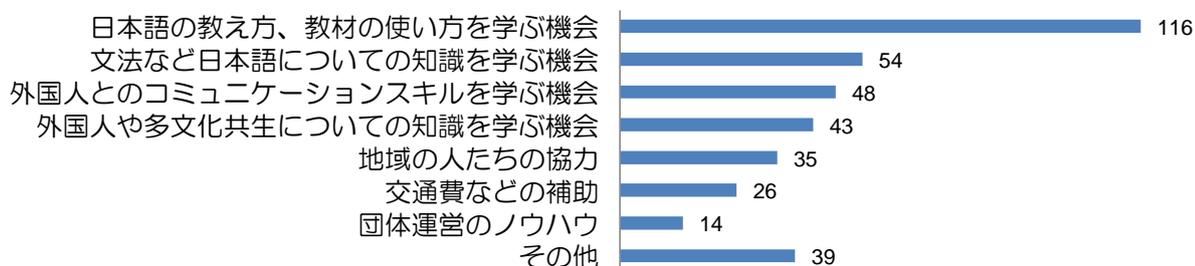
このハンドブックの作成にあたっては、改めて地域日本語教室のボランティア個人を対象にアンケートを行いました。回答からは活動は楽しいことばかりではなく、下に示したような悩みを抱え、解決に向けてのサポートを求めていることも分かりました。ハンドブック作成検討会議では結果を踏まえ、ボランティアが抱える悩みの解決につながる教室運営について議論し、その成果を10項目のヒントにまとめました。

## 活動上の悩み



ボランティアが抱える悩みとして「指導スキルへの不安」がトップで、「活動時間の確保」「活動場所へのアクセス」と続きます。しかし、一方で「特にない」が114名います。「その他」には、ボランティアの確保、ボランティアの高齢化、活動場所の確保、学習者が定着しない、運営について無関心などの悩みが挙げられていました。

## 活動を続けていくために必要なサポート



ボランティアの悩みを解決するために必要なサポートとして、「日本語の教え方、教材の使い方を学ぶ機会」「文法など日本語についての知識を学ぶ機会」等の日本語教育に関するスキルを習得できる機会の提供についての要望が多く、「その他」には「家族の協力」「運営費の補助」「日本文化を学び直す機会」「活動にあたっての悩み解決に向けて一緒に考え、一緒に動いてくれる人材」等についての支援を求める声もありました。



## 指導スキルへの不安にはどうしたらいいでしょうか？ また、学習者間にレベル差がある場合、どうしたらいいでしょうか？

今回のアンケートから、ボランティア教室での指導スキルに不安を感じている方が少なからずいらっしゃるのことがわかりました。愛知県では毎月のように日本語ボランティア向けの教え方の研修等が開かれています。テーマもさまざま、自分の教え方を振り返ることもでき、ぜひ活用したい機会です。指導スキルはあるにこしたことはありません。ただ不足を気にしすぎるのもどうでしょうか。

教室で学習者の質問に答えられなくて困った経験があるかもしれません。そうした時は、分かる人に聞いたり調べたりすれば良いのではないのでしょうか。そして定期的に教室の後などに「質問されて答えられなかったこと」を持ち寄って全員で考えるのはどうでしょう。一緒に答えを見つける積み重ねがメンバーのスキルアップだけでなく、教室の財産にもなるのではないのでしょうか。

アンケートでは、日本語教室に関わる理由として多くの方が「人の役に立ちたいから」と答えていらっしゃいます。「先生」が「生徒」に知識を伝える、という学びのイメージを脇へ置いて、自分らしく人の役に立つという原点に立ち戻って「学習者の意欲に応える」ことに重点を置けば、工夫の余地はあり、スキルの不足ばかりを気に病む必要はないのかもしれない。

それから、学習者間にレベル差がある場合は、トピックシラバスといって共通の話題を全体で扱う方法があります。たとえば「家族」という話題を扱う場合、日本語があまり流暢ではない学習者には「私の家族は〇と〇です」など自分の家族について伝えてもらって、日本語がある程度話せる学習者には「奥さん、だんなさん⇒妻、夫」「上の子ども⇒長女・長男」など家族名称を覚えてもらい実際使ってもらおうという、今よりもほんの少しだけ上のレベルを目指してみるのはいかがでしょうか。

日本語教室では学習者に、自分が日本語で話したことが聞き手に伝わる喜びを感じてもらえるような、交流を通じた伝え合う活動を目指していくことができると良いのではと思います。



Q2

最近「教える/習う」の方式を超えた、あいのままの交流を日本語教室でした方がいいとも聞きます。それってどういうことでしょうか？

近年、地域の日本語教室では学習者とボランティアとの「対話」や「交流」を重視した教室活動が注目されています。対話や交流とはどのようなことでしょうか。それらの教室では、学習者とボランティアとのコミュニケーションを実際の教室活動に取り入れています。実際に学習者とボランティアが、一つのテーマに沿って話すことでリアリティのある対話活動が行われています。ここでは、その一つである事例を紹介しておきます。

- ①コーディネーターによるテーマの提示
- ②お手本となる会話文の提示
- ③学習者とボランティアとのグループ会話
- ④一人ひとり相手を変えて、③で話したことを簡単に伝える
- ⑤学習者が発表する

豊田市（2008）『とよた日本語学習支援ガイドライン』を参考に編集

こうした活動では、実際に「聞く」こと、「話す」ことが多く取り入れられています。しかし、従来のクラスでも、話す練習などは盛んに行われています。では、何が違うのでしょうか。対話・交流を通じた教室活動では、「自分のこと」「自分の考え」を話すということが重視されています。自分のことを伝えたい、相手のことを知りたいという思いや実際の会話場面でのリアリティがことばの習得を手助けしてくれます。また、こうした活動では、教室で学習者が体験するコミュニケーションを本物に近づけることが、日本語能力向上につながると考えられています。

また、ただ話せばよいのでしょうか。こうした活動では、対等な関係が大切になります。互いが互いを尊重していれば、立場や役割を超え、対等な間柄といえるでしょう。それぞれが、相手のルーツに関心を持ったり、趣味や人柄に関心を持ったりすればよりよい教室をつくることができると思います。それだけでなく、学習者が話しているときは「聞いているよ」と態度で示す、言いかけていることばが出てくるまで待つなどの姿勢をとることも大切なことです。



### 教室に参加する外国人にとって居心地がいいと思える教室、ボランティアが外国人と楽しい時間を過ごせる教室にするにはどうしたらいいでしょうか？

参加者全員が楽しく、居心地がいい教室というのは人間関係がうまくいっている、というのが基本ではないでしょうか。まずはボランティア同士の交流が十分あり、風通しがいいこと。そのためには定期的なミーティングはもちろんですが、教室活動の前後にほんの10分でも時間をとって全員の顔を見る機会を取るといいですね。そしてできればお楽しみ、たとえば一緒に食事をする、お茶を飲むなどの時間を設けるのも全員が親しくなる大きなチャンスです。でもそれらの集まりを強制するのではなく、あくまでゆるやかにしておくのも必要かと思います。用事のある時は出席しなくていい、でも用事がないときは出席する、というように。

次に学習者との関係ですが、自分が担当する学習者だけでなく、教室の学習者全員とおしゃべりができる機会を設けるといいと思います。教室の全員で短時間でできるゲームをしたり、ちょっとしたお菓子と飲み物のある休憩時間をとったり、たまにはどこか（近くの公園でもいいのです）へ出かけるなどしてはどうでしょう。きっとたくさんの学習者と話すことができると思います。彼らにとってはいろいろな日本人と話をすることは日本語学習にもなるのです。

最後に毎回の教室活動について。ここでのボランティアと学習者との信頼関係が一番大切ですよ。「この人にはいろいろなことを話しても大丈夫」という気持ちがないと対話が進みません。信頼関係を作るにはどちらも自分のことや本当のことを語ることです。テキストを使って教室活動をしている場合でも、テキストの指示通りに進めるだけでなく、言い換え練習では実際の人名や地名を入れたり、短文作りでは自分の身の回りのことを言ったりしてはどうでしょうか。学習者だけでなくボランティアも言うことが大切です。ここからまた話題も広がることでしょ。

居心地のいい教室へは「また来週も行こう」という気持ちになるものです。それが学習者とボランティアの両方の定着につながります。長く教室に通ってこそ学習者の日本語能力は伸びます。またボランティアも続けることで、やりがいのあるものになることでしょ。



## Q4

### 学習者の日本語能力向上のためにできることは？

学習者の日本語の上達は、学習者の学習意欲につながるだけではなく、日本語ボランティアの励みでもあります。では、外国人が日本で暮らすためには、どの程度日本語を学ばいいのでしょうか。

たとえば、日本語能力のレベルを判定する日本語能力試験では「基本的な日本語を理解することができる」レベルをN4とし、「日常的な場面でややゆっくりと話される会話であれば内容がほぼ理解できる」「基本的な語彙や漢字を使って書かれた日常生活の中でも身近な話題の文章を、読んで理解することができる」としています。レベル到達までの学習時間の目安はおおよそ300時間で、仮に週に1回、2時間の日本語教室だとすると、年に96時間の開催で3年以上かかります。

しかし、学習者の皆さんが日常会話を習得するために2年も3年もかかるかといえば、そんなことはありませんよね。地域日本語教室の学習者の皆さんは、日本に住み、常に日本語に接する環境があります。また、教室では、興味、関心のある情報を入手し、それについて尋ねたり確認したりすることができます。学んだことを職場や地域ですぐに使うことができます。地域日本語教室で仕事や生活に基づいた生きたコミュニケーションを学ぶことで、学習者のスキルは向上します。「日本語を話すのは週に1回の日本語教室だけ」という状況では、せっかく学んだことも翌週には忘れてしまいます。地域日本語教室で学習者が日本語を使う場面を考え、それに応じた日本語支援をすることは、学習者のスキル向上につながる大切な要素です。

地域コミュニティでの人間関係の希薄さが言われる昨今ですが、まずは、教室の中で、指導者と学習者ではない同じ地域に住む隣人としての人間関係を作ることで、日本語の教科書だけでは見えない、地域で暮らす外国人が必要としている日本語が見えてくるのではないのでしょうか。必要なことを、様々な関わりの中で身に付けられる教室は、学習者の日本語の能力向上に役立つだけでなく、地域の多文化共生を実践する場にもなるでしょう。

出典：日本語能力試験 <http://www.jlpt.jp/>



## 日本語を勉強したい外国人のニーズに応えるには？ 子どもがいる、仕事が忙しいといった困難があっても気軽に参加できる教室をつくるには？

日本語教室にやってくる外国人に「何が勉強したいですか？」と聞くと、漢字とか、文法とか、会話といった答えや、日本語能力試験N3合格、バイクの免許を取りたいなど、さまざまなものがあります。けれども、質問にあるように子どもがいても、仕事が忙しくても参加できること、そのニーズにこそ、応えたいと思います。

子どもがいても参加できる教室とはどのような教室でしょうか。子連れで参加する学習者が気兼ねすることなく気軽に参加できる環境とは、仲間の学習者もボランティアも傍らにいる子どもを邪魔だと考えず、自然なこととして受け入れることではないでしょうか。けれども、幼い子どもはじっとしていることができません。動き回る子どもの安全を守るには物理的な環境も必要です。日本語教室には託児ルームや託児専門家が重要なのだという意識を広めていく必要があるでしょう。なお、子連れの親子をそのまま受け入れたり、託児環境を整えて対応している教室もありますので参考になるでしょう。

仕事が忙しくても参加できる教室とはどのような教室でしょうか。忙しい合間をぬって参加できる教室が職場にあれば、そのニーズに応えることができそうです。企業と連携した教室の設置がもっと進むことが望まれます。とはいえ、忙しくて日本語教室どころじゃない人たちもいることでしょう。そのような人たちが少し時間ができたときに再び参加するためには、いつでもだれでも参加できるようなプログラムであることが必要です。

また、日本語を習得することなく長く滞在している外国人も少なくありません。そのような人も社会に参加し自分の力を発揮するためには日本語は必要不可欠です。かれらに日本語教室に参加してもらうことも、ニーズに応えることではないでしょうか。

地域に住む外国人の状況にあった学習環境を考えながら、日本語教室の活動をつくっていきましょう。



## 私の目標は教室を存続させていくことですが・・・

教室の運営を一人で抱え込んではいませんか？ 日本語教室は運営する人あつての活動です。教室が存続していけなくなったら、それまで蓄積してきた成果が失われてしまいます。また、「存続」＝「継続」は自然に実現できるものではなく、代表者だけでできるものでもありません。そこに関わるボランティア一人ひとりの意識がとても大切です。日本語教室には、「外国人が日本語を学ぶ場」と「地域で活動する市民団体」という2つの顔があります。ここでは、「地域で活動する市民団体(以下、活動団体)」についてお話しします。

活動団体を継続していくには様々な課題を解決していく必要があります。ボランティアのみなさんのアンケートからも「ボランティアの高齢化が心配」「教室の場所の確保が大変」「交通費を支給してほしい」「地域の人からの外国人への偏見をなくしたい」などの意見がありました。これらの問題を解決していくためには、「人」「物」「金」「情報」という4つの要素が重要だと言われています。次の質問に答えながら、あなたの教室について考えてみましょう。

- ①「人」
  - ・必要な人材が集まっていますか？
  - ・足りない場合どうしていますか？
- ②「もの」
  - ・活動の場を確保できていますか？
  - ・確保するために何が必要ですか？
- ③「金」
  - ・団体運営のための会費を集めていますか？
  - ・必要な経費を誰がどのように調達していますか？
- ④「情報」
  - ・学習者やボランティアの情報を共有していますか？
  - ・教室や団体の情報をどのように地域に伝えていますか？

いかがですか？ 頭の中が「?・?・?」になってしまいましたか。これらの質問を個人だけではなく、ボランティア全員で考え、団体としての意見をまとめて方向を決めていくことが、継続のためにもとても大切です。日本語教室ボランティアのみなさん一人ひとりが団体運営の重要な担い手であることをしっかりと自覚して行動していくことが、確実に「存続」につながる道だと思います。





## 外国人が孤立せず、プライドや希望を持って日本で暮らすために、日本語教室の果たせる役割はあるのでしょうか？

想像してみてください。ある日、ことばも文化もほとんど知らない土地で暮らすことになったとしたら、どんな気持ちになるでしょう。とても不安で心もとなく、ストレスを感じてしまうのではないのでしょうか。子どもがいたり、仕事をしなければいけなかったりしたら、なおさらです。これは、日本に住む外国人に限ったことではありません。見知らぬ土地に住むことになれば、だれでも感じることです。そんな時、「わからないこと、困ったこと、思っていること」を伝えられる手段があり、伝えられる相手がいれば、あるいは、伝えられる場所があれば、不安は少なくなるのではないのでしょうか。

ボランティアに限らず、地域の日本語教室に関わるすべての人が、まず認識しておかなければいけないことは、学習者も地域住民であり、ボランティアと学習者は対等であるということです。そして、地域の日本語教室で学び合っているのは、「わからないこと、困ったこと、思っていること」を伝える手段としての日本語であり、ボランティアは学習者にとって、身近な地域住民の一人であるということです。ボランティアとの関係がよければ、ボランティアの存在そのものが安心につながります。

また、急に教室に来なくなってしまった学習者はいないのでしょうか？ もちろん、それぞれの事情があるのですが、たとえば、日本語がなかなか覚えられず嫌になってしまっているかもしれません。何か困っていることがあって余裕がなくなっているかもしれません。そんな時、ちょっと声をかけてみましょう。「どうしたの？ 来られるようになったら、いつでも来てね」と気にかけてくれるその一言が、きつとうれしいと思います。さらに、学習者も地域の一員として何かの役割を担ったり、あるいは学習者から何かを学ぶ場を創ることができれば、自分も必要とされていると思うことができ、それもうれしいことでしょう。

「同じ地域住民として学び合う」という気持ちを持って、「日本語を教える」ことだけに集中しすぎずに、どうすれば日本で暮らしやすくなるのかを考えながら活動を展開すれば、学習者にとって日本語教室は居心地のいい場になります。外国人が孤立しない、プライドや希望を持って暮らせる社会というのは、日本人も孤立しない、プライドや希望を持って暮らせる社会なのだと思います。



Q8

## 外国人が自立して生活できるようになるためには？

地域に暮らす外国人の中には、日本に来て 20 年以上経つが、日本語が分からないという人は珍しくありません。来日当初、出稼ぎ的な意識で日本語を学ぶ必要がないと考えた人や、仕事が忙しく時間が無かったという人も多いようですが、裏を返せば日本語を学ぶメリットがそれほど無かったのかもしれない。

ところで、外国で自立して生活するとは、どういうことでしょうか。日本語は分からないけれど、働き、家族を養い、税金を納めるというだけでは、自立しているとは言えないのでしょうか。確かに、日本で生活する上で、日本語が分からないということは不便なことです。本人だけではなく、周りの人たちも、伝えたいことが伝わらない不自由さがあります。このような言葉の問題から、ゴミ問題を始めとする生活習慣の違いからのトラブルが生まれ、対応策として外国語の看板が設置されたり、市役所に通訳が配置されたりしてきました。

しかし、問題は言葉なのでしょうか。情報が無い、ルールを知らないということは、外国人に何をどうすればいいのかわからないという不安を与える一因ですが、ただ「こうしなさい」と言うだけでは、規則を理解して行動することにはつながりません。なぜそのルールがあり、どんなことに役立っているのか、どうしたら情報の行き届かない外国人に伝わるのか等、外国人と共に考える関係づくりが必要です。

また、2008 年の世界的不況では、失業に伴い家を失くす、学校を退学するといったことが社会問題になりましたが、不安定な就労環境が生活を難しくするのは外国人だけの問題ではありません。外国人の自立のためには、誰もがあたりまえに学び、働け、お互いを一個人として尊重し合い支え合う社会を考えることが必要です。

地域の日本語教室は、学習者を地域につなげ活躍できる場を考えることができます。居場所があり役割を持ち人として尊重されることで、地域の人たちと親しくなっていく。地域の日本語教室は、そのきっかけ作りをする。地域は、言葉や文化が異なる人たちと、知り合い、話し合うことで、多様な価値観が生まれ豊かになる。そんな関係ができれば、外国人がお客さんにならず、社会に参画する機会も生まれ、自立した生活ができるようになるのではないのでしょうか。



## 日本語教室は地域づくりにどのような役割を果たしているのでしょうか？ 何のために地域とつながるのでしょうか？

みなさんは、どのような地域に住みたいと思いますか？ 子どもたちのためにどのような地域を創りたいと思いますか？

今、社会は、たくさんの情報が飛び交い、世界中の様子が一瞬にしてわかるようになった一方で、隣人との交流が薄れ、一人ひとりが自分のごく限られた空間にこもってしまい、孤立感や閉塞感を感じやすい状況になっています。そのため、自分の考え方や価値観と異なるものに対して、居心地悪さや不安を感じてしまうことも少なくありません。でも、考え方や価値観に唯一正しいものがあるわけではありません。

地域も同じです。もしも、1つの価値観しか認められない地域だったとしたら、世の中の変化に対応できないもろい地域になってしまうでしょう。多様な価値観、多様な考え方が認められる地域は、変化にも強い豊かな地域なのではないでしょうか。

地域の日本語教室は、そんな多様な価値観や考え方を体感できる場でもあります。日本人と外国人が同じ地域の一員として対等な立場で学び合う日本語教室では、日本語だけでなく、お互いの文化や価値観を楽しく知り合うことができます。もちろん、ボランティアにとっては「地域づくり」より、まずは目の前の学習者のニーズに応え、どんな活動をしていけばいいのか考えることが優先されるでしょう。ボランティアと学習者がその活動を通してよい関係を築き、学習者がその地域や日本を住みやすいと感じ、好きになってくれたとしたら、そして、そんな学習者がたくさん増えていったとしたら、それだけでとても意義のあることです。東日本大震災の時、世界中からエールや支援が送られてきたのは、きっと、日ごろのそうした活動によるところも大きいでしょう。

でもさらに、普段の教室活動の中で少しでも、ボランティア以外の地域住民と協力できる場面をつくることができれば、それをきっかけに持続可能な地域づくりにつながり、広がっていくのではないのでしょうか。そうした地域は、学習者にとっても日本人にとっても暮らしやすい地域になるはずです。そして、それこそ、行政でもなく、教育機関でもなく、地域住民だからこそできる活動だと思うのです。



## Q10

### 目標と言われても特にないのですが・・・

「日本語ボランティアとしての目標は何ですか？」という質問に対して、「特にない」という回答を書かれた方が少なからずいらっしゃいました。

始めたばかりなので目標と言われても特に思い浮かばないという方もいれば、長年活動を続けてきて、自然と生活の一部となった結果、特に目標といったものを意識しないという方もいました。しかし、どの方も、学習者の力になりたい思いで活動されているように感じられ、別に目標というものを意識しなくても、それで十分ではないかなと思いました。地域の日本語教室は、多くのボランティアの方により支えられており、その継続した活動そのものが何よりも意味があると思うからです。

そのうえでのご提案ですが、もしも、皆さんの教室がある市町村の外国人の国籍別人口をご覧になったことがないのでしたら、一度、県や市町村のホームページなどで調べてみることをお勧めします。皆さんの市町村は、県内で何番目に外国人が多いのでしょうか。また、国籍別の割合は他の市町村と比べてどんな特徴があるのでしょうか。そして、その割合は、皆さんの教室で勉強している外国人の国籍と比べてどんな違いがあるのでしょうか。

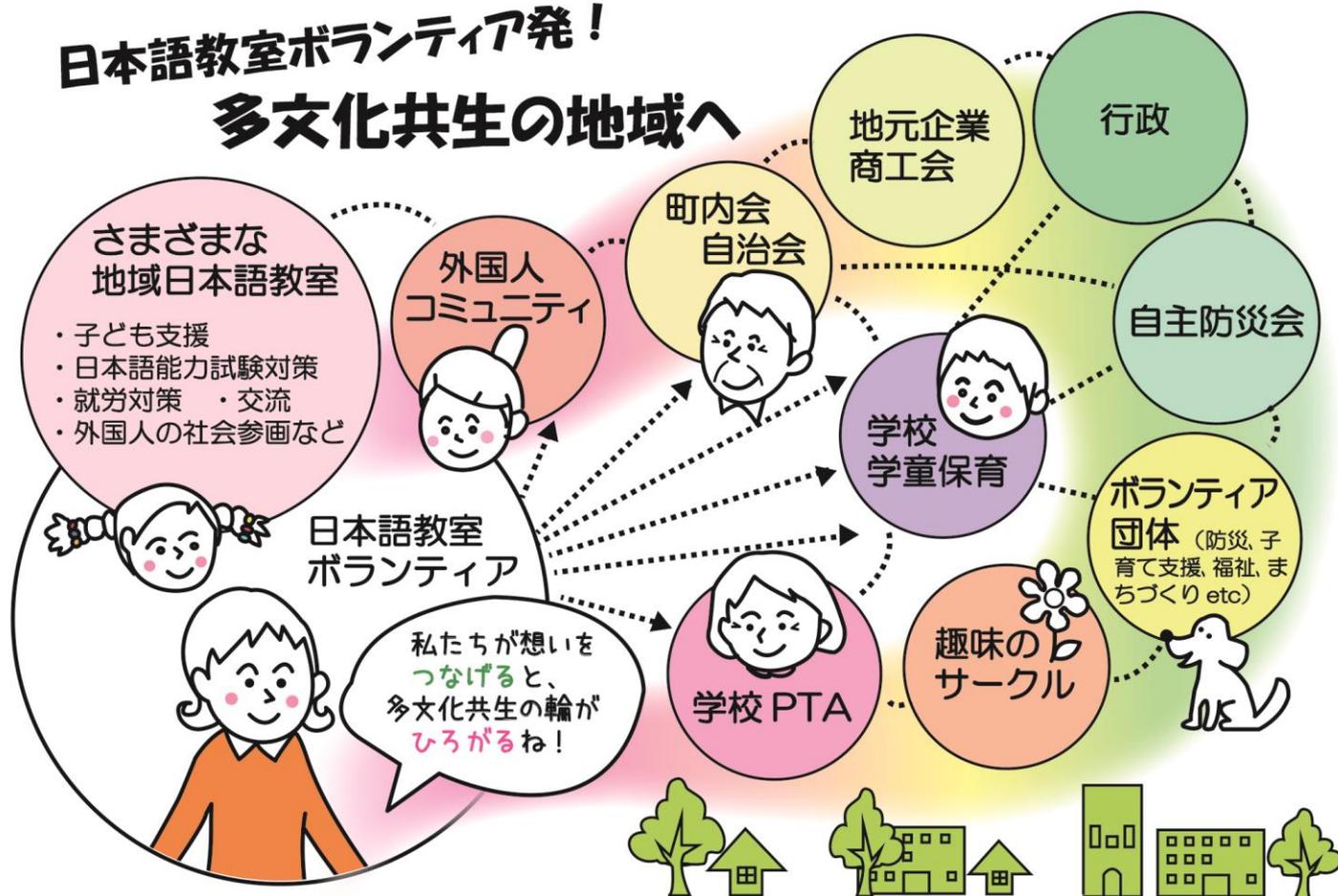
日本語を教えるということは、目の前の外国人が日本での生活に困らないために支援する、という視点が中心になると思います。しかし、日本語を習得することにより、その外国人と周りの日本人との円滑な共生が進みます。「外国人のため」だけでなく「地域のため」になっているのです。定住化が進み、日本人と同様に地域との関わりが求められる外国人が増えています。それは、日本語教室が地域にとってより重要な存在になってきているともいえます。

そんな地域に貢献するボランティア活動をされているのですから、自分のまちの国籍別人口一覧を頭の片隅に浮かべながら今週もまた教室に通う、というのも、なかなかよいのではないのでしょうか。

## まとめ

地域日本語教室の活動が《つなげる ひろがる》活動へと発展していく様子をイメージとしてまとめました。このハンドブックが、多文化共生の地域を実現していく手掛かりとして日本語ボランティアのみなさんに役立つことを願っています。

### 日本語教室ボランティア発！ 多文化共生の地域へ

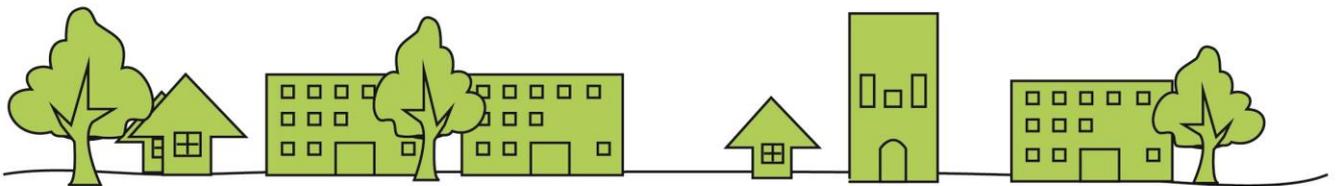


#### 地域日本語教室ハンドブック作成検討会議委員 (50音順・敬称略)

- |       |                |
|-------|----------------|
| 伊藤 典子 | ことばの会          |
| 川崎 直子 | 愛知産業大学短期大学     |
| 北村 祐人 | とよた日本語学習支援システム |
| 栗木 梨衣 | (公財) 愛知県国際交流協会 |
| 藤野 晋爾 | 岡崎市市民協働推進課     |
| 米勢 治子 | 東海日本語ネットワーク    |



Aichi Chiiki Nihongo Kyoshitsu  
Handbook  
Tsunageru Hirogaru



あいち地域日本語教室ハンドブック「つなげる ひろがる」

2015年1月発行

【発行】愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室

〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 052-954-6138(ダイヤルイン)

Email: tabunka@pref.aichi.lg.jp

<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html>

【企画・編集】特定非営利活動法人 トルシーダ

※この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成事業により実施されています。